

主体的にキャリア形成に取り組むことができる子どもの育成（2年次）

—中学校における家庭学習の在り方と、自学自習できる力を育てるシステムづくり—

上畑 直久（京都市総合教育センター研究課 研究員）

主体的に学ぶ意欲は、学ぶことに価値を感じることから生まれてくる。学ぶことが自らのキャリア形成に役立つと感じられるように支援する体制づくりが急務である。昨年度は、授業でも授業外でも子どもたちが主体的に学ぶことのできる学習サイクルを構想し、家庭で考えてきたことを授業で発表・交流し、互いに共有すべき価値を習得する取組を行った。今年度は、「21世紀型能力」の実践力を手掛かりに、ポートフォリオを活用した目標づくりと振り返り活動を提示した。「なりたい自分」を子ども・教師・保護者が共有し、それに近づくために何が必要かを考えることで、「将来を見通した学びを考える力」の育成を目指した。

第1章 「主体的に学ぶ」ことへの意識と「自ら将来を切り拓く」ための課題

第1節 家庭学習・学習意欲に関する調査から
昨年度の研究から、主体的に学ぶ姿を実現する条件として、次の二つの必要条件を設定した。

- 授業でも授業外においても、自分で考えたり判断したりしたことを主張できる場を設けること、また、それを行うためにふさわしい学習課題を準備すること
- 学習課題の解決のために必要な基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、取り組むための学習習慣や学習規律の指導、授業と授業外をつなぐ学習の支援を行うこと

その上で、昨年度の調査結果を分析し、家庭学習を含めた学習意欲が発現する要因を考察した。

- 自分で考えたり判断したことを主張したりする学習課題に取り組む子どもほど、家庭での学習時間が長い。また、先生や友だちにほめられる経験が多い。
- 「わかった」「できた」と認知する子どもほど、学習への役立ち感が高く、次なる有能さへの欲求が生まれる。
- 学習への役立ち感が高い子どもほど、家庭学習の必要感が高く、家庭学習を含む一連の学習サイクルに有用な価値を認識して、主体的に学ぶ傾向が強まる。

子どもたちは、家庭学習の必要性を感じている。その中で、主体的に学ぶ意識が家庭学習につながりにくい子どもたちへの支援が課題である。

第2節 「自ら将来を切り拓く子ども」を育てるための課題とは

主体的に学ぶ意識が家庭学習につながりにくい原因は、「自ら学ぶ目的」が明確になっていないからだと考えられる。子どもが「自ら将来を切り拓く」には、自ら学ぶ目的を理解し、目指す目標を達成するために必要な学びを選択し、見通しをもって取り組むための「将来を見通した学びを考える力」が求められる。すすんで学習に取り組みにくい子どもたちにとって、必要な“すべ”は、目標を立て、必要な学びを理解し、適切な方法を選択して計画的に取り組むことである。

第2章 主体的にキャリア形成に取り組む子どもを育成するために

第1節 学習意欲を高める学習習慣とは何か

前章の分析から、子どもたちの家庭学習に影響する要因は、学習が自分の生活にどのように役立っているかを認知すること、学習が役立つことを認知する活動や場面があることだと考えられる。

そこで、子どもたちの家庭学習状況を成績群ごとに分析し、学習意欲と学習習慣の関係を図のようにまとめた。家庭学習に向き合う子どもたちの姿勢に応じて支援の方法を考えると同時に、全ての子どもたちが家庭学習に自信をもって取り組むこ

とができるように、「21世紀型能力」の実践力と「キャリア教育」の基礎的・汎用的能力をもとに、「将来を見通した学びを考える力」を定義した。

「将来を見通した学びを考える力」
自分の生き方や進路を考え、将来を設計し、その実現に向けて必要な学びや、それを実現するために取り組むべきことを選択し、決定したことを自律的に粘り強くやり抜いたり、状況に応じて取り組む目標や内容を軌道修正したりして、自己を実現するための最善を選択し行動する力

第2節 「将来を見通した学びを考える力」を育てる支援システムの構築

子どもたちに適切な支援を行うため、ポートフォリオを活用した「キャリア・カウンセリング」の活動を設定した。ポートフォリオに教師がコメントを書き、子どもたちの「振り返り」や目標の「見通し」への「フィードバック」型のアド

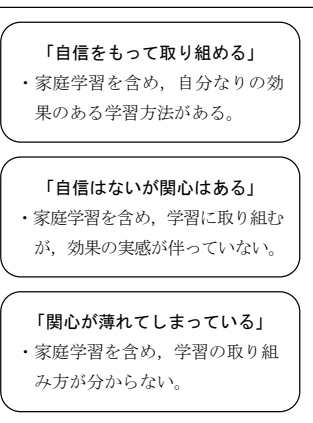


図 学習意欲と学習習慣の関係

「フィードフォワード」

設定した目標を、指定した期間で目標を達成するためには何をどの程度取り組めばよいかを予測して活動すること

バイスを行う。目標達成に必要な具体的な方法と計画をともに考え、見事目標が達成された時にその取り組み方がメタ認知され、他の場面でも有効に活用できる「将来を見通した学び」となる。また、ここで示す共有すべき価値は、子ども・教師・保護者が共有し、家庭学習習慣の確立と「自律」「自立」に必要な能力の向上を図ることである。

第3章 主体的にキャリア形成に取り組む子どもを育成するための実践

ここで示す活動の目標は『『なりたい自分』の実現』である。活動を子どもたちが必要とするタイミング（定期テストの前後）に設定することで、子どもたちは学習や学習外の活動への「見通し」と「取り組み方」について考える。

第1節 アンケート型ポートフォリオを活用した目標づくりと振り返り活動の実践

C校の実践は、＜教師－子ども＞の対話を中心にした「キャリア・カウンセリング」の活動である。「未来シート」は、目標やその達成のための具体的な取組を記入するアンケート型ポートフォリオである。起床時間、就寝時間、家庭学習時間のほか、学習や学習外の活動への目標とその達成のための具体的な取組を、一週間後の自分を想定して記入する。一週間後、返却されたシートに書かれた教師のコメントを確認した後、新たなシートに生活の振り返りと前回の目標達成度、次の目標や具体的な取組を記入する。これを三週間行い、三回のデータを「未来レポート」としてまとめ、目標を立てて取り組む上で自分が工夫してうまくいったところ、悩みやよくしたいところなどを振り返る。教師は、子どもの記述に対して、目標を達成するための見通しや具体的な取組を問い、それに向けてのアドバイス（＝「フィードフォワード」）を行う。この活動は定期テスト後の6月と12月の2回行った。また、活動を支える取組として、京都市の「生き方探究教育（キャリア教育）」教材である「キャリア＜進路＞ノート」を活用した特別活動の授業を3回行った。

6月 春季定期テスト→授業1「将来の目標を立てよう」
10月 文化祭 →授業2「家庭学習を振り返る」
11月 秋季定期テスト→授業3「こんな私になりたい・将来の夢」

「未来シート」「未来レポート」の記述は、量的・記述内容の視点から分析した。高い成績群の子どもほど、目標達成への「見通し」や「具体的な取組」を明確に書けていることがわかった。

第2節 他者評価型ポートフォリオを取り入れた教科学習の実践

A校の実践は、＜子ども－子ども＞の対話を中心にした「家庭学習に取り組む習慣を付ける」活動である。その目的は、家庭学習の必要感はあるが家庭学習につながりにくい子どもたちの支援である。「家庭学習やったねシート」は、子どもたちが互いに必要な宿題や自主学習を申し合い、取組の有無を記録する他者評価型ポートフォリオである。

「実践力」：家庭学習に取り組む習慣を付ける

共有すべき「価値」

- ・決めたことを自律的に粘り強く取り組む【自己管理】
- ・弱い自分を認め、それでも取り組める工夫を考える【自己理解・課題対応】
- ・お互いに励まし合いながら、やり続ける【協働】

活動は、11月に行われる4回目の定期テスト前に、1単元6時間の授業の冒頭で行った。その結果、多くの子どもたちが、学習の取り組み方を振り返り、学習への姿勢を改めねばならないこと、また、協働の効果について述べていた。

第4章 主体的にキャリア形成に取り組む姿の普遍化を目指して

第1節 研究の成果と課題

A校での実践の結果、家庭学習時間、家庭学習課題の取組状況に大きな改善傾向がみられた。また、C校での実践の結果、家庭学習時間1時間以上の子どもの割合が増加し、全国平均と比べて約20ポイント上回った。両校とも子どもたち自身の学習規律や生活習慣を守ろうという意識が高く、実践により、家庭での具体的な取組や共有すべき価値が明確になったからだと考えられる。一方で、家庭学習に価値を感じてはいるものの、取組がうまく結果につながらない子どもたちに対し、「努力すればできるようになる」という価値を高めるため、子どもたちが「あきらめない」で取り組むことができる支援を続けていくことが大切である。

第2節 「主体的に学ぶ」意欲を育てる「実践力」と「共有価値」

子どもたちの向上心や自尊心を支え、「なりたい自分」の実現に向けた“すべ”を具体的に指導するとともに、それを価値として共有する環境や関係性を整備して、子どもたちを支援する。これらの価値を、教師集団が共有し、フィードフォワードによる価値の提示と「キャリア・カウンセリング」としての対話を重ねることで、子どもたちは社会を生き抜くための必要な力を身に付け、安心して将来の学びを見通すことができると考える。